

中央ヨーロッパにおける言語の創造：長期的な観点から<sup>32</sup>

Tomasz Kamusella

## ヨーロッパにおける舞台作り

## 西ヨーロッパにおける俗語から言語へ

圧倒的なラテン語の陰に隠れた俗語（または新しい書記変種）の控え目な出現は、それぞれの国家でもっとも永続的で政治的に優勢な権力の中核（首都）と関連していた。パリのロマンス語変種、つまり将来のフランス語は、13世紀の変わり目に行政目的で使用されはじめた（Wolff 2003: 112）。同じく——またはそれ以上に——印象的に登場していた南フランスのロマンス語変種（プロヴァンス語）の識字は、「異端者」と目されたカタリ派共同体に対する大量虐殺に近い弾圧により13世紀初頭に消滅した（Kienzle 2001; Niel 1995; Wolff 2003: 109-111）。言語の出現における権力や武力の役割は、カスティーリャ語（スペイン語）の場合にもはっきりと確認できる。13世紀に、レコンキスタを指揮したカスティーリャ・レオン・ガリシアの国王アルフォンソ10世によってその言語は行政の第一言語とされた。その急速な出現は（強制的な改宗や追放を通じた）イベリア半島における信仰の均質化とアラビア語とその文字の禁止と関連していた（Schlösser 2005: 40-41; Yasumura 2009: 368-369）。それは15世紀の初頭には地中海地域の支配的な列強であった現在ではほとんど忘れられているアラゴン連合王国の創設と直接関係していた。カスティーリャとの連合およびその後の政治的衰退により1716年にアラゴン連合王国は解体したが、同時に行政におけるカタルーニャ語の使用も禁じられた（Dorel-Ferré 2010: 5, 24-33; Schlösser 2005: 62）。

書記変種としてのフィレンツェ語やトスカーナ語（イタリア語）の出現は、それとは異なる経路をたどった。14世紀のそれらの出現は、ダンテやペトラルカの俗語詩の絶大な人気に関連していた。両詩人共に「より本格的な」作品では威信の高いラテン語にこだわり続けたが、はからずもフィレンツェ（トスカーナの首都）で、そしてその街のロマンス語変種で執筆した。トスカーナ語を自らの言語であると主張する強力で広大な領土の国家が存在していなかったために、アペニン半島各地の数多くの国家と結び付いていた他のロマンス語諸変種での識字を、とりわけヴェニス（ヴェニス語）やナポリ（ナポリ語）において確立することができた。国内全域で（ラテン語と並んで）使用される単一の俗語を備えていたフランスやスペインとは対照的に、こうしたアペニン半島における書記変種や識字の多様性は、16世紀に最初の「言語問題 *questione della lingua*」を引き起こし、さらには1583年設立のフィレンツェのアカデミア・デッラ・クルスカに代表される「言語アカデミー」の画期的な

<sup>32</sup> 注意：進行中の研究であるため引用はお控えください。

モデルを生み出した（Parodi 1983）。アペニン半島世界における使用言語の選択やその標準化の方法についての議論は1861年にイタリアの国民国家が建国されるまで続いた（Schlösser 2005: 41）。それでも、標準イタリア語がイタリアの住民の半数にとって日々のコミュニケーション媒体となるには20世紀中頃まで待たなくてはならなかった（Mauro 2005: 71）。

スペインとフランスの場合と同様に、英語を王国の公用語とする過程も、イングランド国王の統治のイギリス諸島全域（今日のブリテン島とアイルランド）への拡大と関連していた。公的な場で用いられる言語が、それ以外の変種から英語に置き換えられたのである。たとえば1537年に、イングランド王国のアイルランドでアイルランド語が禁止された（Crowley 2005: 13）。また1707年には、スコットランドとイングランドの合併により、スコットランドで（1424年から17世紀初頭まで国家の公用語として機能していた）スコットランド人の現地のゲルマン語変種の代わりに英語を採用することが決定された。とりわけ大きかったのは、それまでに聖書の完全なスコットランド語翻訳が存在していなかったために、1611年のロンドン英語による欽定訳聖書（ジェームズ王訳）がスコットランドで公認されたことであった（Kay 2006: 49-50, 73-74, 87-92）。

1492年という象徴的な年に、カスティーリャ語（スペイン語）の最初のカスティーリャ語文法が刊行された。（これは史上初のヨーロッパの俗語の印刷された文法書でもあった [Burke 2004: x]）。作者のアントニオ・ネブリーハは、「言語は常に帝国の完全な道具であった」という有名な言葉を残している（Rosa 1995/1996より）。こうした考えはすぐにスペイン国王に受け入れられ、ラテン語や他の国内の書記言語は段階的にカスティーリャ語に置き換えられていくことになった（Resnick 1981: 7）。フランス国王も同じ考えで、領土の中央集権化を念頭に1539年に有名なヴィレル・コトレの勅令を發布した。それは国家に対するカトリック教会の影響力を弱めることを目的とするものではあったが、その第110条と第111条はフランス語を王国の唯一の公用語にしようとするものであった。とはいえ、そうした試みは、ラテン語の書籍よりもフランス語の書籍の方が多く出版されはじめる17世紀初頭になってようやく現実のものとなった（Nadeau and Barlow 2008: 45-46, 53）。

ラテン語は、（西方教会の）ヨーロッパでもっとも巨大かつ安定した国家であった神聖ローマ帝国で、行政言語や書記言語としてより強固な足場を築いていた。10世紀から1806年まで存続したその広大な帝国の版図は、西ゲルマン語方言連続体の南部および中央部に広がっていた。もっとも、帝国の西部と南部では西ロマンス語方言連続体の一部を、また東部では南・北スラヴ語方言連続体の一部も含んでいた。日々の話し言葉（俗語）を書記や他の公的な用途で用いることができるかもしれないという考えは、12世紀から14世紀にかけてその帝国で生まれた。当時、プロヴァンス語やフランス語の武勳詩が現地のゲルマン語諸変種で模倣され、独自の発展をみせはじめていた。それらの諸変種はドイツ語/トイチュ語 *Duitsch / Teutsch* といった綴りこそ異なるものの同一の名称——現在のオランダ語やドイツ語の自称名の起源である——で知られていた。13世紀後半にそれらは行政の用途



で——控え目にはあるが——用いられはじめた (Wolff 2003: 128-130)。

時を経て16世紀には、同じような書記変種の出現がスカンディナヴィアでも見られた。主としてルター派の宗教改革による俗語化の影響の下で、デンマーク語とスウェーデン語の最初の文書が姿を現した。逆説的ではあるが、遠く離れたアイスランドでは12世紀中頃以来の現地のノルド語(アイスランド語)での識字が存在し、デンマーク王国の中央集権化や海外への進出に続くデンマークの支配拡大によりその言語が周縁化される16世紀から17世紀まで存続した (Haugen 1976: 32, 39-40)。そのスカンディナヴィアと神聖ローマ帝国の間で、つまりバルト海沿岸と北海の南岸沿の地帯に、14世紀から17世紀にかけて商業都市と海軍都市によるハンザ同盟が繁栄した。交易のための容易に理解できる俗語の必要性から、「低地ドイツ語」(当時のドイツ語/トイチュ語の一種)がハンザ同盟の第一の行政書記言語の地位に押し上げられた。低地ドイツ語はリューベックやハンブルク、ダンツィヒ(グダニスク)といったハンザ都市の日常のことばであったことにくわえ、現在のエストニアからポーランドまで広がっていたチュートン騎士団の国家(後のプロイセン)全域でも広く(選良層によって)用いられていた。(地方の農民はバルト語やフィン=ウゴル語、スラヴ語の様々な変種を話していた)。当時、低地ドイツ語を話していた人々は、その言語と低地諸国のドイツ語(オランダ語)の違いを意識してはいなかった (Dollinger 1970: 260-262)。

17世紀の後半までに低地ドイツ語は(公的な)書き言葉としての地位を失った。当時、神聖ローマ帝国はネーデルラント共和国の独立を公的に認め(1648年)、そのドイツ語話者は自らのオランダ語の体系化を行った。その言語による聖書の翻訳は1637年に刊行されている (Vandenputte, Vincent and Hermans 1986: 21)。(とはいえ、18世紀を通してラテン語はオランダ語と並んで低地諸国における2番目に重要な言語——フランス語は僅差の3番目——であり続けた [Burke 2005: 15-16])。現在のオランダ語がドイツ語と異なっているのと同様に、プロイセン側のドイツ語話者の変種も(ルターの言語に由来する)標準ドイツ語とは異なっていたが、最終的には彼らはマルティン・ルターによる1534年の聖書のマイセン変種(方言学者により「東中部ドイツ語」に分類される変種)翻訳を受け入れた。オランダ語の出現は神聖ローマ帝国と袂を分かとうとする低地諸国の取り組みの結果であったが、プロイセンが自らの低地ドイツ語を放棄したのは、その国家が神聖ローマ帝国との政治的・経済的な結び付きを強化したためであった。

しかし、ルター訳聖書のトイチュ語を神聖ローマのすべてのゲルマン語話者のドイツ語とするという宗派を超えた同意が現れる前は、他の多くのトイチュ語(ゲルマン語諸変種)が互いに競い合っていた。西ヨーロッパに印刷がもたらされた15世紀中葉以降、印刷業者は事実上それらの変種の数を7つほどの「印刷機言語 *Druckersprachen*」にまで縮減した。ルター訳聖書により帝国のプロテスタントの北部とカトリックの南部の分断は明確になったが、帝国の再統一を望んでいた皇帝のカトリックの宮廷は、広く大衆から支持されていたそのプロテスタントのドイツ語を採用した。こうして帝

国の言語であった「共通ドイツ語 *Gemeines Deutsch*」(今日のオーストリア変種である「東上部ドイツ語」に基づいていた)は破棄されることになった (Szulc 1999: 63-69)。しかしながら、帝国の西側諸国とは異なり、帝国内では1784年までラテン語が行政や学術論文の第一言語であり続けた。その年ヨーゼフ2世が、ハプスブルクの領地全域、つまり帝国の南半分とハンガリー王国で国家のあらゆる公務をドイツ語で行うことを定めた法令を公布した (Kann 1974: 185)。(ハンガリーでは6年後の1790年にこの布告は無効とされ、ラテン語の再導入が可能となった [Kósa 1999: 67])。

### 東ヨーロッパにおける聖なる言語

印刷技術および宗教改革とそれに続く宗教戦争——すでに前節で示唆した——のヨーロッパの言語状況への影響を分析する前に、東ヨーロッパにおける識字の発展を確認しておく必要がある。1054年の大シスマはキリスト教の2つの宗派間にイデオロギー的な鋭い亀裂を生じさせたが、両派間の激しい対立はそれ以前にすでに見られた。キリスト教を新たな地に広めるということは、ローマとコンスタンチノーブルの双方にとってその領土をいずれかの勢力圏が取り込むことを意味していた。その過程で、その領土の新しいキリスト教徒たちは西方教会か東方教会のどちらかの政治、文化、イデオロギーを選択しなければならなかった。

西ヨーロッパの場合とは異なり、コンスタンチノーブルは単一の言語とその固有の文字を押し付けることはなかった。(ただし、西ヨーロッパでも、アペニン半島でローマの支配が確立される前の紀元前の第一千年紀には、各々の変種のために様々な文字を発展させようという傾向が見られた [Urbanová and Blažek 2008 を参照])。キリスト教をできる限り広い範囲へ広めるために新約聖書の他言語への翻訳が認められており、それを通して固有の文字と共に新しい書記言語が創造された。こうした動きは今日のインドや南アジアで観察される動きと似ている。それらの地域では、ある変種が一人前の言語となるためには、他の言語とは共有されない固有の文字を備えている必要があると信じられている (Campbell 1997: 18-24, 90-91, 122-126; Coulmas 1989: 179-201 を参照)。

第一千年紀の前半に、東ローマ帝国とその勢力圏で、聖書がシリアではセム語変種のシリア語に、エジプトでは同じくコプト語に、モエシア(今日の北ブルガリア)では東ゲルマン語変種の(東)ゴート語に、さらにはインド=ヨーロッパ語の孤立変種のアルメニア語やコーカサス語変種のグルジア語に翻訳されている。シリア語のその名を冠した文字はアラム語の書記体系(ヘブライ語に近い)に由来し、またコプト語とゴート語はギリシア文字をモデルとしているが、アルメニア語とグルジア語の書記体系はギリシア語やシリア語、そしておそらくはヘブライ語の書記体系からの要素を取り込むことで発展してきたと考えられている (Campbell 1997: 6-7, 59-62, 114-115; Rogers 2005: 123, 161-167)。



ヨーロッパの観点から見たこうした伝統におけるもっとも重要な発展は、860年代の大モラヴィア王国（現在のチェコ共和国、スロヴァキア、ポーランド南部、ハンガリー）へのキリスト教の布教活動の中で生じた。その過程でサロニカ（テッサロニキ）の南スラヴ語変種が書記言語となったが、その言語のために（東）ローマ帝国全域で用いられていた様々な書記体系を利用した新しい文字が考案された。グラゴル文字である（Miklas 2000）。しかし、そのグラゴル文字を用いた（教会）スラヴ語<sup>33</sup>の識字の最盛期は長くは続かなかった。880年、そうした発展にもかかわらず、大モラヴィア王国は西ヨーロッパのラテン語を用いる識字を公的に採用し、その5年後にはグラゴル文字は一掃された（Tornow 2005: 34-35, 105-106; Trěstík 2010）。グラゴル文字で書いていたスラヴ語話者の知識階層は追放されるか、または他の場所で働き口を探さなければならなかった。ブルガリアが同じようなイデオロギー的な方法で、コンスタンチノーブルからの政治的独立を再び主張したことはまさに渡りに船であった。893年、教会スラヴ語がギリシア語に代わりブルガリアの公用語とされたのである。しかしながら、ギリシア文字に通じていたブルガリア人の選良層にとってグラゴル文字はあまりにも奇異に感じられるもので、結果としてグラゴル文字はギリシア文字をモデルとして作られたばかりのキリル文字に置き換えられた（Crampton 2005: 15-17; Dzurova 2007）。

その後、バルカン半島や中央・東ヨーロッパの正教徒の間では、ギリシア語とキリル文字の両方を用いる教会スラヴ語が書き言葉として用いられた。988年、白海から黒海にまで版図を広げていた北スラヴの国家（キエフ）ルーシが、コンスタンチノーブルからキリスト教と共にキリル文字を用いる教会スラヴ語を導入した。それでもローマとの競争は続いた。10世紀初頭、マジヤール人（ハンガリー人）が大モラヴィア王国を滅ぼし、中央ヨーロッパの大部分とさらには西ヨーロッパまでを蹂躪した。大モラヴィア王国の西側3分の1（ボヘミア、モルダヴィア、シレジアの諸地域）は神聖ローマ帝国に組み込まれ、そこでグラゴル文字を用いる教会スラヴ語の識字は温存された。しかしながら、その言語の周縁化はさらに続き、クロアチアのアドリア海北沿岸地帯で18世紀の末まで命脈を保った（Nazor 2008: 14-19; Trunte 2012: 84-104）。

帝国は、国内のスラヴィア（ボヘミア）と帝国とルーシの間に位置していたもうひとつのスラヴィア（将来のポーランド）を区別するという難しい問題を抱えていた。後者は966年に前者のスラヴィアからローマのキリスト教を導入していた。こうした固有名詞の混乱を避けるために、1000年に帝国最高法院が「外部の」スラヴィアを「ポーランド」に改名することを提案した（Urbańczyk 2008）。同年またはその翌年、ハンガリー（今日のスロヴァキアからクロアチアやボスニアに広がっていた）もローマからキリスト教を導入している（Kontler 1999: 53）。それにより「異教的な」テュルク語のルーン文字風の文字〔ロヴァーシュ文字〕は、ハンガリーのトランシルヴァニアで17世紀まで

<sup>33</sup> 英語では、「Slavonic」という語はグラゴル語やキリル文字を用いる典礼言語を指すためのみに用いられているが、その同語源語の「Slavic」はその他のスラヴ人のあらゆる言語を指すために用いられる。

ずかに残り残したが、次第に使われなくなった。その文字の仲間は、キリスト教化以前のブルガリアやルーシで（スカンディナヴィアのルーン文字と並んで）、またイスラム教の採用以前の黒海とカスピ海の間に住んでいたテュルク系人々の間でも使用されていた（Franklin 2002: 110-111; Hosszú 2013: 7-19）。2010年代の前後から（右から左に書かれる）この文字を用いるもうひとつのハンガリー語の識字が急速に発展してきているが、それはハンガリー政治の勢力分布における右派の急進と深く関係している（Leanyfalú 2014; News 2014）。

14世紀にワラキアとモルダヴィアのドナウ川流域諸公国（将来のルーマニアとモルドヴァ）が出現したことで、これらの東方のロマンス語話者たちがどちらのキリスト教を採用するのかという問題が再び持ち上がった。カトリックのハンガリーと正教のルーシ諸公国に挟まれていた両公国は、それ以前にワラキアが従属していたハンガリーからの分離を強調するために、正教派のキリスト教を選択した。しかし、ブルガリアやルーシのスラヴ語話者の場合とは異なり、両公国の住民は、自らの固有の変種（または他のロマンス語変種）ではなく教会スラヴ語をキリル文字で書く識字を採用した。16世紀の前半、両公国は（住民の大部分がロマンス語を話すワラキア人であったハンガリーのトランシルヴァニアと共に）オスマン帝国の属国となり、次の世紀にはロマンス語変種（当時はワラキア語とモルダヴィア語と呼ばれていた今日のルーマニア語とモルドヴァ語）をキリル文字で書くというよく似た新しい正教的な識字が発展した。1688年にキリル文字を用いたワラキア語（ルーマニア語）の聖書翻訳が刊行されたことでそれは絶頂を迎えた。その偉業により、ワラキア語は初期スラヴ語として当時増加していた正教の聖なる典礼言語の仲間入りを果たした（Tornow 2005: 166-168, 382-392）。

教会スラヴ語の宗教的文献や新約聖書のギリシア語は、スラヴ語やギリシア語を話す正教徒にとっては（完全ではないにしろ）理解可能なものであったが、それはカトリック教会のラテン語のウルガータや典礼書が西ヨーロッパのロマンス語話者にとって理解し易いものであったのと同じである。ケルト語、ゲルマン語、スラヴ語、フィン＝ウゴル語の話者たちは、ラテン語を用いたカトリックの素養を身に付けるためにラテン語を学ぶ必要があった。教会スラヴ語の基礎的な理解するためにその言語を学ばなければならなかったワラキアやモルダヴィアの東方のロマンス語話者たちが経験した苦労も同じものであった。

実在するいかなる言語共同体も用いていない言語と結び付いたこうした限られた種類の宗教に基づく識字を伝えていくには、特殊な手段が必要であった。ユダヤ人がそうであったように、それは宗教学校を通して主として男性から男性へと世代を超えて受け継がれていた。同じ方法がオスマン帝国（その住民たちには「崇高な帝国 *Devlet-i Aliyye-i*」という名で知られていた）でも用いられた。その帝国では、統治を担う選良層は宗教と司法のためのセム語系の古典アラビア語、行政のためのテュルク語系のオスマン（・トルコ）語、文学のためのインド＝ヨーロッパ語系の（宮廷）ペルシア語というまったく異なる3つの言語を習得することが必要とされていた。オスマン帝国の選良層にな



らんとする少年たちはその3言語をマドラサで学んだ。3言語はいずれも村内や街の市場で日常的に用いられているアラビア語やテュルク語、ペルシア語の俗語とは大きく異なっていたため、それらを家庭で習得することは不可能であった。とはいえ、前述の正教の(聖なる)書記言語の場合と異なり、オスマン帝国の知的階層の生活で用いられていた3言語は、いずれも共通のアラビア文字と、帝国の主要言語であるオスマン語内のアラビア語やペルシア語からの多数の借用語——それがオスマン語を日常で用いられるテュルク語の(諸)変種から大きく異なるものとしていた——で結び付いていた(Woodhead 2012)。

こうした発展はダイグロシアあるいはポリグロシア(異なる生活領域における異なる変種の使用[Ferguson 1996: 25-39])を生じさせるが、ギリシア語の場合、それはその言語に与えられた単一の名称によって見えにくくされていた。古典ギリシア語、すなわち紀元前5世紀のアッティカのコイネーは、500年後の新約聖書のキリスト教典礼ギリシア語とは大きく異なるものであった。また、東ローマ帝国(ロマニア *Romania*)の(「ビザンツ」)ギリシア語は、千年におよぶ時間差から典礼ギリシア語とはかけ離れたものとなっており、またその行政の言語は、黒海からシチリア島まで広がっていたギリシア語の方言地域内で地域変種を話す人々には十分に理解できないものでもあった。1820年代に現在のギリシア国家が建国される前は、ギリシア人は自身とその言語をギリシア語で「ローマ人(語) Roman」と呼んでいた。今日、公式な形容詞は「ギリシアの Hellenic」であるが、19世紀にはギリシア内の慣習が発展し、ギリシア国内のギリシア人と言語を「ギリシア人(語) Hellenic」と呼び、オスマン帝国内のギリシア人は「ローマ人(語) Roman」と呼んでいた(Mackridge 2009)。

彼らが使用している変種や名称にかかわらず、すべてのギリシア語話者をまとめ上げていたのは同一のギリシア文字であった。その宗教的に条件付けられた規範的な影響力はきわめて大きく、オスマン帝国内の正教徒はしばしば自らのアルバニア語、スラヴ語、テュルク語の変種を書くためにその文字を用いた。その役割からギリシア文字は、西ヨーロッパにおけるラテン文字、またはオスマン帝国やより広いイスラム世界におけるアラビア文字を思い起こさせるものであった。同じように、スラヴ語やギリシア語、アルバニア語を話すイスラム教徒は、自らの変種をアラビア文字で書いていた。こうしたことはユダヤ人やアルメニア人(アルメニア使徒教会の信徒)の間でも見られた。彼らは自らの変化に富んだ俗語をそれぞれヘブライ文字とアルメニア文字で書いていたのである(Dedes 2000; Galustian 1981: 83; Huković 1986; Sitarz 1992: 7-16を参照)。

近代以前の時代は、一神教の宗教は、その正典があるひとつの固有の言語に還元されていたことに象徴されるように、信徒間のいかなる言語的差異にも勝っていた。共通の(聖なる)文字がまさにその書記体系により思想の循環が促進される文化的兼言語的な領域を作り上げ、正典の言語を橋渡しとしてまったく異なる変種を話す人々の言語共同体を結び付けていた。しかし、宗教対立やそれに伴う文化の壁の出現にもかかわらず、地中海地域では交易やコミュニケーションが必要事であり、リング

ァ・フランカ(「フランク人の言語」)の書かれないピジン(誰の第一言語でもないことば)が登場した。11世紀から19世紀にかけて、宗教的・民族言語的に異なる背景をもつ船乗りたちは、そうしたロマンス語を基礎とする変種を用いて会話をしていた。そこにはテュルク語やアラビア語、ギリシア語から採られた数多くの要素が含まれていた(Dakhliia 2008)。同じように、宗教と文字は、まったく同一の言語共同体の中に様々な信徒の集団を作り出しもした。実際に、彼らは街角や市場では(信仰を超えて)いかなる問題もなく会話を行っていたが、書き言葉によるコミュニケーションのレベルでは、まったく同じ変種(またはそのより公的なレジスタ)でありながらも、別の宗教を信仰する人々には普通は理解できない異なる文字を用いて意見を表明していた(Paić-Vukić 2007を参照)。

ヨーロッパでは文字と宗教の結び付きは規範的にきわめて強く、9世紀以降新しい文字は育っていない。その上、俗語はそうした第二千年紀以前に開かれた宗教の文字と強く結び付き、元々の言語共同体はそれに忠誠を示していた(また現在もそうであるのが普通である)。大規模な文字の変更(外部からの強制によるものを除いて)はヨーロッパではわずか2例しか観察されない。かつてワラキアとモルダヴィアのドナウ川流域諸公国で、選良層が当時「後進的」と見られていた正教世界との歴史的・文化的な結び付きを断ち切ろうとして、近代化のために当時大きな成功を収めていたフランスの国民国家との純粋に言語的なロマンス語的共通性に希望を託したことがあった。「東方のフランス人」としての「ルーマニア」民族の再創造のために、1860年代の初頭に両公国が主導してルーマニア語を書くための文字をキリル文字からラテン文字に置き換え、1866年には両公国の合併により成立したばかりの自分たちの国民国家の名称として「ルーマニア」を採用した。

ルーマニアという名称は西欧人の耳にはすこぶる「ロマンス語風」に聞こえるが、一方でそれは反西欧の伝統主義者たちにとっても納得のできるものであった。彼らの目には、それは正教の東ローマ帝国のギリシア語名、つまりギリシア語のロマニア *Romania* の採用であると映った。続いて、その変種の「真の」ラテン語的性格を取り戻すために、その「ルーマニア語」と新たに名付けられたワラキア語/モルダヴィア語のフランス語化と脱スラヴ語化が行われた(Close 1974; Drace-Francis 2005; Mărza 2008)。これらの変更は、1991年以降モルドヴァ共和国となるロシア領のベッサラビア(歴史的モルダヴィアの東部)には適用されなかった。モルドヴァ語は1990年までキリル文字で書かれ、数多くのスラヴ語風の言い回しが含まれており、また言語名は2013年に「ルーマニア語」と変更されるまで維持された(Moldovan 2013)。キリル文字を用いるモルドヴァ語は、1990年にモルドヴァから独立した事実上の国家である沿ドニエストル共和国で、ロシア語とウクライナ語と並んで公的に使用され続けている(Moldova 2012: 1708)。

こうした言語の文字は変更可能であるという考えは、公用語における徹底した複文字主義(複数字の併用)が行われてきた事情から、ドナウ川流域諸公国で独自にかつ早い段階で生じていたと考えられる。両公国には教会スラヴ語やワラキア語(ルーマニア語)がキリル文字で書かれた長い伝統が



あり、行政はアラビア文字を用いるオスマン語でイスタンブールとやり取りせねばならず、また 1711 年から 1821 年にかけては固有の文字を備えたギリシア語が両公国で行政における公用語であったのである (Close 1974: 14)。

近代化の手段としての文字の変更（より厳密には文字の固定）は、書記言語としてのアルバニア語の出現と関連している。1908 年にその言語は「先進的な」ラテン文字で書かれることが決定されたが、それはイスラム教徒のアルバニア語話者は自らの変種をアラビア文字で書き、正教徒やカトリックのアルバニア語話者はギリシア文字やラテン文字、さらにはキリル文字さえ用いて書くという文学の文化が生まれて半世紀を経た後のことであった。また、単一の言語は単一の文字で書かれるべきであると信じる人々が混合的な文字を提案したこともあった（初期のルーマニア語作家たちも 19 世紀の前半に同じような道をたどっている [Boia 2001: 31]）。(Hradečný, Hladký, Monari, Šístek and Hradečná 2008: 275-279; Mojdl 2005: 24-27)。

#### 中央ヨーロッパの問題

言語についての考え方や俗語から言語を創造する方法についての——東ヨーロッパと西ヨーロッパ——2つの伝統は、中央ヨーロッパでも、とりわけポーランド・リトアニア共和国とハンガリー王国には共通する部分がある。両国にはカトリック教徒と正教徒が混住し、またそれほど多くはないものの軍事的・社会的に意味のある程度のイスラム教徒も存在した。ハンガリー（16 世紀のオスマン帝国による占領以前の）で、また特にポーランド・リトアニア共和国で、ユダヤ人のための非領土的な宗教・政治的自治制度が確立されていた。14 世紀にはじまる迫害の結果、当時ユダヤ人は西ヨーロッパからほとんど姿を消しており、18 世紀には、ヨーロッパのユダヤ人の大半がポーランド・リトアニア共和国共和国に住んでいた。よく似た宗教に基づいた非領土的な自治は地方でアルメニア人のために準備され、一方でロマ人（「ジプシー」）のためにはその生活様式により規定される自治が認められていた (Kopanski 1995: 1-44; Mróz 2000; Polonsky 2010)。

ポーランド・リトアニア共和国における宗教を異にする集団のための非領土的自治の活用は、キリスト教徒によるレコンキスタ以前のイスラム教のイベリア半島における社会組織や、オスマン帝国におけるミット制にきわめてよく似ている。正教徒、ユダヤ人、アルメニア人、カトリック教徒のためのオスマン帝国のミットは、まさに前述のポーランド・リトアニア共和国における非領土的自治と同じような機能を果たした。すでに存在したモデルを参考にして、オスマン帝国による貴族階級の取り込みの傍らで、そうした制度をイスラム世界から取り入れたのはポーランド・リトアニア共和国であり、その逆ではないようである (Hupchick 1994; Kłoczowski 1998: 164-175)。

このように民族宗教的な差異を承認、または時に渋々ながらも容認する点で、中央ヨーロッパとオ

スマン帝国は、民族宗教的な信仰の均質性を重視する西ヨーロッパや東ヨーロッパと大きく異なる。ここで東・西ヨーロッパについて言っているのは、ヨーロッパ（や世界）の見方についての 18 世紀に端を発する今日の高度にイデオロギー化された範疇のことである。宗教改革の結果、ポーランド・リトアニア共和国やハンガリー、オスマン帝国では、プロテスタント共同体（領主、領民、農民のすべて）が非領土的自治を享受する様々な共同体の仲間に加わるようになったが、西ヨーロッパ（特に神聖ローマ）では、改革に続いた宗教戦争——最終的には大量虐殺と言えるような三十年戦争に至った (Wilson 2009) ——が領土的に説明される政治的均質性に関するもっとも重要な原理を生み出した。簡単に言えば、ある者の領土に属する場合には、その者に宗教に属する (*cuius regio eius religio*) というものであった。宗教戦争は多くの血を流し膠着状態に陥っていたが、各領国に信仰の均質性の原理を導入し、他の宗教を信仰する人々を認めないことで最終的に決着した。その過程で領域的な（ヴェストファーレン的）国家のモデルが作り上げられた。そうした国家の最大の（多くの場合、理想的または理想化された）特徴は、完全な主権と単一体を形成する小型の領土である (Meyn 1992)。

こうした東ヨーロッパにおける発展は、ロシア帝国、特にそのヨーロッパ側の半分が有していた併合をよしとする帝国のイデオロギーに現れていた。ルーシ諸公国の一公国（さらに言えば辺境の一公国）としてのモスクワ大公国は、「第二のローマ」のコンスタンチノーブルの滅亡を受け、自らを「第三のローマ」と称した。「神聖ルーシの領土獲得」における大公国の成功は目覚ましいものがあり、1721 年にはロシア帝国が成立した。当時存在した唯一の独立した巨大な正教国家であった。17 世紀末にピョートル大帝が実権を掌握すると、誕生したばかりのその帝国は「近代化のため」（より厳密には「西欧化のため」）の改革に乗り出し、プロテスタントの西ヨーロッパと北ヨーロッパ、すなわち当時のオランダとスウェーデンに匹敵する国家となることを目指した。ロシア帝国の政策の中心は政治的・文化的均質性と中央集権化の構想であった (Lazari 1996)。

18 世紀の終わりにポーランド・リトアニア共和国が分裂すると、非キリスト教徒が「神聖ルーシ」を汚染することがないように、ロシア帝国は境界地帯をユダヤ人居留地とすることで獲得した領土を封鎖した。19 世紀になると、均質性への欲動は、すべての帝国の臣民を均質的に正教徒にしようとする政策をもたらした (Khodarkovsky 2002: 189-201 を参照)。それがすぐに成果を挙げることがなかつたため、1860 年代から 1905 年にかけて、非ロシア語話者の言語的なロシア語化の試みが大々的に行われた。いずれの政策も完全ではなかつたにしろある程度の成果を挙げたが、帝国の非ルーシ地帯東部では、イスラム教徒や多様な言語の話者たちも次第に受け入れられるようになり、（厳格な監視の下ではあったが）行動の自由も認められるようになった (Kappeler 2001; Rodkiewicz 1998; Thaden 1981; Zajaczkowski 2009)。

当時盛り上がりを見せていた汎スラヴ主義に刺激されて、そうした政策をロシア帝国の非スラヴ諸語に拡大適用するよりも先に、帝国内外のすべてのスラヴ諸語にキリル文字を導入しようとするより



穏健な計画を提案する者たちもいた (Gil'ferding 1871)。しかし、その計画は反対に遭遇した。カトリック教徒とプロテスタント教徒が「正教の文字」を受け入れる準備ができていなかったためである (Zinkevičius 1996: 259-296 を参照)。戦間期にロシア帝国はソヴィエト連邦となったが、正教ロシア帝国の西部国境地帯を引き継がなかったことは重要である。それ故に、全体主義的手段を用いることで、その共産主義国家の、また 1940 年代の終わりまではモンゴル国とタンヌ・トゥヴァといった隣接国家のほぼすべての言語を書くために、キリル文字を強制することが可能であることが明らかになった (Martin 2001: 414-422)。1950 年代には、ソヴィエトの評議員が中国にラテン文字の代わりにキリル文字を採用することを強く求めたが、当時は毛沢東の共産主義体制下で漢字の置き換えを漠然と考えられていた (Zhou 2003: 63, 156)。

1991 年のソヴィエト連邦の崩壊により、かつてないほど民族言語的・宗教的に均質なロシアが出現した。2000 年に連邦内のタタールスタン自治共和国がタタール語の文字をキリル文字からラテン文字に切り替える決定をしたが、その 2 年後、ロシアの下院は、ロシアの領土内に固有のあらゆる言語はキリル文字で書かれる必要があることを定めた法律をもって応酬した。このようにして、2 世紀に及ぶロシアの民族文化的な均質性の追求は、文字のレベルでようやく達成された。この成功により、ロシアはそれ自体でひとつの野心的な言語圏を形成することになった。たとえば、国内の諸言語に対する借用語は、キリル文字の規範的な最上の番人でもあるロシア語を通すことではじめて認められる (Faller 2011: 131-134 を参照)。

話が逸れたので本題に戻ろう。ヨーロッパの中央に位置し、ラテン文字の西ヨーロッパとキリル文字の東ヨーロッパの中間に位置する中央ヨーロッパで、どのようにして俗語は言語となったのか。かつて同一の名称 (ドイツ語・トイチュ語) を共有していたゲルマン諸語の場合と同様に、当初はあらゆるスラヴ語変種が「スラヴ語」——ラテン語では *lingua S(c)lavonica*、教会スラヴ語では *Slovenski* ——と呼ばれていた (Dulichenko 2011: 209; Holzer in Okuka 2002: 186)。たとえばスロヴァキア語 *Slovenčina* とスロヴェニア語 *Slovensčina* の紛らわしい名称から理解できるように、その伝統は様々な形で今日にまで生き続けている。19 世紀のはじめには、存続していたその伝統から、あらゆるスラヴ語変種は単一のスラヴ語に統合されるべき単なる「方言」に過ぎないという考えが生じた。かつて神聖ローマ帝国のゲルマン語話者が自らの変種を (標準) ドイツ語に「統合した」か、またはそれ自体を「捨て去った」のと同じ考え方である (Kollar 1837; Šafařík 1837)。

しかしながら、西ヨーロッパと中央ヨーロッパで俗語が言語になった中世後期から近代初期にかけて、スラヴ語方言連続体の大部分を包含するような単一の国家は存在していなかった。ゲルマン語方言連続体に対するその役割は神聖ローマ帝国が果たした。書記言語として姿を現すことになった最初のスラヴ語の俗語は、ボヘミアのスラヴ語であった。ボヘミアもその一部であった神聖ローマ国内でのゲルマン語やロマンス語の俗語の成功事例に影響を受けて、それは 12 世紀から 13 世紀にかけて

発展した。もうひとつの影響は、9 世紀の大モラヴィア王国におけるグラゴル文字を用いた教会スラヴ語の識字——それはボヘミアで 11 世紀の後半まで存続した——のそれであった (Trunte 2012: 88-89)。当然のことながら、ボヘミアのスラヴ語話者たちは自らの変種の文字としてラテン文字を選択した。そして 15 世紀以来、彼らはそれをボヘミアという語のスラヴ語形に由来する「チェコ語」と呼んだ (Dulichenko 2011: 209)。

15 世紀初頭に生じたフス派による初期の改革とそれに続くフス戦争は、神聖ローマ帝国が典礼でチェコ語の代わりにラテン語の使用を重視したことが大きな原因であった。この運動に名を与えたヤン・フスは、チェコ語の新しい綴字法を提案した人物でもある。その綴字法は、文字と音の一対一の対応が選択され、ひとつの音 (音素) を表すための二重字 (2 つの文字の組み合わせ) を排除するものであった。フス主義は「異端」として非難されたため、その綴字法もまた「異端的」と見なされ、隣国のモラヴィア (今日のチェコ共和国の東半分) のカトリックのスラヴ語話者は、古い「カトリック」綴字法を使い続けた。それにより——1918 年まで存続したが今日では忘れ去られてしまった——固有のモラヴィア語が生まれた (Kamusella 2009: 423; Řepa 2001)。

同じような、またはより広範な論争が、15 世紀から 20 世紀にかけて、オスマン帝国とハプスブルクの領地 (1867 年以降はオーストリア・ハンガリー帝国) を隔てていた流動的な軍政国境地帯が長い間横切っていた南スラヴ語方言連続体で、書記言語となるべきなのはどの変種で、それにどのような名称を与えるべきかをめぐって展開された。その地域の中世のスラヴ語国家で、今日まで存続しているものはない。もしそれが存続していたならば、明確な名前と確固たる識字の伝統を備えた安定したスラヴ語が生まれていたかもしれない。さらに悪いことに、中世におけるそもそものカトリック教徒とキリスト教正教徒の対立は、スラヴ語を話すイスラム教徒やプロテスタントが現れたことで次第に多次元的なものとなった。またそれに従って、文字やそれに関連する綴字法の数も大幅に増加した。

16 世紀から 19 世紀にかけて、南スラヴ地域で言語に関する計画や名前が大量に表れたが、それは特に宗教改革と反宗教改革の影響によるものであった。双方の相反する影響力は、印刷機がプロテスタントとカトリック教徒に公教要理や聖書の俗語翻訳を量産し続けることで増幅された。それ以前は、聖書を翻訳するという行為は、その聖なる言語、つまりは神の言語に対する恐るべき冒瀆であると考えられていた (Fine 2006; Peti-Stantić 2008)。

聖書を俗語に翻訳することは、言語を創造し体系化することにつながる。そうして作られた言語の多くは今日にまで残っている。16 世紀、チェコ語に代わってポーランド語が中央ヨーロッパのスラヴ語地域におけるリングア・フランカの地位に着いた。チェコ語は「異端的」との批判を受けていたためである。そのため古チェコ語 (またはカトリック) の二重字を用いる綴字法がポーランド語を書くために採用された。ポーランド語は——1540 年代にポーランド・リトアニア共和国においてラテン語に対する公用語の地位を獲得しただけではなく——今日のエストニアからルーマニアにかけ



ての地域で書かれ話された。興味深いことに、その言語はいずれかの地域的な変種から派生したのではなく、ポーランド・リトアニア共和国の貴族階級の脱領域化された社会方言に由来する。貴族間の結婚や国内全域での移動を通して、彼らは11世紀から14世紀の間に混ざり合うようになっており、——地域的・民族的な出自の違いにもかかわらず——彼らの話し言葉は統一されていた。まさにそのことばによって、貴族階級は19世紀まで続いた農奴制ゆえに土地に結び付けられていた大多数の住民——農民——と区別されていた (Dulichenko 2011: 224-228)。

印刷業者はラテン語文字での初期や印刷のための異なる2種類の書体(フォント)を考案した。中世後期の写本に基づくゴシック体(ドイツ字体、亀甲文字体、バスタルダ体、シュヴァーベン体など)と、アンチック体(1世紀から2世紀の間に発展していた古典ローマの文字形態を真似た文字通りの「古い文字」)である。16世紀の初頭にはその2種類の書体の分業が進み、アンチック体はラテン語の印刷本のために、ゴシック体は新たに体系化された俗語の出版のために用いられるようになった。宗教改革はこうした新しい規範を破壊し、どの言語で書かれようとも、プロテスタントのための書籍はゴシック体で、カトリックのための書籍はアンチック体で印刷されるようになった。

こうした新しい動きは主にルター派のプロテスタントに限られ、カトリックの皇帝がルター派のドイツ語とゴシック体も取り入れることで、帝国の約半数のプロテスタントに手を差し伸べようと尽力していた神聖ローマ帝国ではまったく定着していなかった。ナショナリズムの時代であった19世紀の間に、ゴシック体は次第にドイツ国家の国語としてのドイツ語との結び付きを強めていった。アンチック体に有利になるようなラテン文字を取り除くために、ドイツ国家は異なる民族言語的背景をもつルター派の人々を取り込んだ。最終的に、1941年以降、ゴシック体は「ユダヤ的」と批判され、第三帝国で禁止されたことで使用されなくなった。当時のドイツの法律では、アンチック体が「通常の文字 *Normal-Schrift*」であるとされていた (Borman 1941; Kapr 1993; Morison 1972)。

文字の種類における区別はロシア語の台頭と密接に関係している。正教世界やイスラム世界では、またユダヤ人の間でも、聖書を俗語に翻訳することはタブーであり続けていた。知識階層が行政や知的探究に従事する際には、各々の「聖なる言語」に従っていた。宗教は社会的・知的・政治的生活を営むための唯一の正当な枠組みであり続けた。正教派のキリスト教徒もイスラム教徒も、その機械的な(「思考しない」)性格ゆえに印刷を忌まわしい行為と見ていた。聖なる言語とは、ペンを取るその手を通したすべての写字生の心との親密なつながりを楽しむものであった。西ヨーロッパで近代化が進展したことで、この問題についての見方に変化が生じはじめた。そうした変化はポーランド・リトアニア共和国の東半分——主として正教徒地域——でいち早く進展した。その地域は1596年に「東方典礼カトリック教徒」のために典礼でのキリル語を用いた教会スラヴ語の使用を残していたカトリック教会と同盟を結んだ。1699年まで、そのポーランド・リトアニア共和国の東半分(またはリトアニア大公国)における第一公用語はキリル文字で書かれる現地のスラヴ語変種であった。それはル

テニア語(すなわちルスキー語 *Ruski*)と呼ばれていたが、その名前はルーシに由来するもので、13世紀以降継続的に使用されていた (Grynchyshyn, Gumets' ka and Kernyts' kyii 1977: 5; Niendorf 2011: 25-48)。

ルテニア語は、スラヴ語話者が容易に理解できるように世俗的および宗教的な事柄を書くために行政や印刷で使用されていた。ラテン語の方がポーランド語よりも重宝されていたポーランド・リトアニア共和国の西半分(またはポーランド王国)のカトリック地域とは状況が異なっていた。ポーランド語と教会スラヴ語を共に同時に利用していたルテニア語作家が、西ヨーロッパから東ヨーロッパへのまたは逆方向の思想の伝播の橋渡し役となったため、ルテニア語の吸引力はさらに東方のモスクワ大公国でも認められた。その上、ルテニア語は、当時すでに7世紀以上にわたり日常の話し言葉と離れていた南スラヴに起源をもつ公用の教会スラヴ語よりも、はるかにモスクワ大公国のスラヴ語諸変種に近かった (Bumblauskas 2013: 26-27; Kravetskii and Pletneva 2001; Stang 1932)。

18世紀の変わり目に、ピョートル大帝はモスクワ大公国に近代化(より厳密には西欧化)の計画を導入し、大公国をロシア帝国へと変貌させた。この計画の中心は文字の改革(「近代化」)であった。彼はオランダでアンチック体を模範とする新しい種類のキリル文字を委託した。それはグラツダンカ *Grazhdanka* (「市民の文字」)として知られ、ピョートル大帝はスラヴ語(または「スラヴ・ロシア語」)とも呼ばれることもあるいくらか俗語化された教会スラヴ語)で書かれたあらゆる非宗教的な(そもそもは主に軍事に関する)書籍をその文字を用いて印刷することを命じた。伝統的なキリル文字は宗教的な写本や文献を保存するものとなり、それ故に今日それはしばしば「教会キリル文字」や「古キリル文字」と呼ばれる (Shitsgal 1959)。

ピョートル大帝はまた、半世紀前に設立されていたフランスの科学アカデミーに倣い、サンクト・ペテルブルクに科学アカデミーを設立した。そのアカデミーの任務のひとつは、パリのそれと同じく、帝国の言語の辞書を編纂することであった。そのプロジェクトにとって不運だったのは、1830年代まで、教育を受けた帝国の選良層の大部分がポーランド語かドイツ語の識字能力はあっても、将来のロシア語の識字能力はなかったことである。教会スラヴ語の威光はきわめて大きく、ロシア語は均等にモスクワのスラヴ語変種と教会スラヴ語から構成されるべきであると提案する妥協案が現れるのはようやく19世紀の変わり目になってからであった。同じ頃、前述のアカデミーが公的な辞書を刊行していた (Vinokur 1947)。しかしながら、辞書はその言語に単一の名称を与えておらず、言語名が何を示すべきかについて明確に定義されることなく「スラヴ・ロシア語」やロシイスキー語 *Rossiiskii* など様々に呼ばれていた。その後1830年代を通して、その言語はロシア語でロシイスキー語として知られるようになったが、公的にはルスキー語 *Russkii* と呼ばれた。後者の名称はルテニア語のルテニア語名(ルスキー *Ruski*)に倣ったもので、現在でもそれが使用されている (Kamusella 2012b)。



ポーランド・リトアニア共和国では17世紀の終わりに途絶えたルテニア語の話も、もうひとつの重要な展開の中で引き継がれていた。19世紀の後半に、キリル文字を用いる小ルテニア語と小ロシア語の出版物が、それぞれオーストリア・ハンガリー帝国東部のガリツィアと、ロヴノ（リウネ）からキエフまでのロシアで現れはじめた。1863年から1905年までの間、ロシアで小ロシア語の書籍や雑誌を刊行することや、オーストリア・ハンガリー帝国から小ルテニア語の書籍や雑誌を輸入することが禁止されていた（Rodkiewicz 1998）。同じ時、オーストリア・ハンガリー帝国では、小ルテニア語変種が東部のガリツィアで教育言語や地方行政での公用語となっていた。20世紀の変わり目に、小ルテニア語と小ロシア語の支持者たちはそれら2つの変種を単一の国家の本質的に単一の言語として見ており、両変種のための単一の名称を「ウクライナ語」と決定した。

その一方で、1905年の革命がもたらした政治的自由化を受けて、試験的なロシア化政策に揺り戻しが見られたが、それにより白ロシア語（ベラルーシ語）での現代的な印刷も可能になった。ベラルーシの東方典礼カトリック教会（ギリシア・カトリック）の信徒のための出版物はラテン文字で、正教徒のための出版物はキリル文字で書かれた。こうした二文字使用は第二次世界大戦中にベラルーシとウクライナの全領土がソヴィエト連邦に編入されるまで続いた。それ以前の戦間期に、ウクライナ語とベラルーシ語はそれぞれソヴィエト連邦のウクライナ・ソビエト社会主義共和国と白ロシア・ソビエト社会主義共和国のイデオロギ的基盤として標準化されていた。このことは、小ロシア語と白ロシア語をロシア語の「地方方言 *narech'ia*」と見る19世紀のロシアの公的な立場との一時的な断絶を意味していた（Hruchevsky 1965）。当時、そうした地方方言を話す者たちは、教育を受けることでそれを忘れ、何よりもロシア語の母語話者並みの言語能力を獲得することが期待されていた（McMillin 1980; Rudnyc' kyj 1967; Shevelov 1980）。

この2つの方言から昇格した言語の標準化の一連の過程は、ベラルーシ語とウクライナ語の歴史にまつわる問題を生じさせた。19世紀中頃以前に書き言葉で用いられていた変種で、現在その2つの標準語のどちらかに引き継がれているものはない。一方で、ソヴィエト連邦では、民族言語に基づいて定義される各連邦共和国は少なくとも中世にさかのぼる文化的・政治的歴史を有していなければならないと考えられていた。こうしたディレンマは、14世紀から17世紀の間にルテニア語で書かれたもの全体を「古ベラルーシ語」と「古ウクライナ語」に「正当に」属するものであると認めることで解消された。ひとつの資料の2つの現代語へのこうした分配は、純粋に地理的な原則に従って行われた。かつてリトアニア大公国で書かれたあらゆるルテニア語の文書のうち、キエフの尚書院に残るものは「古ウクライナ語」に、ヴィルナ（現在のリトアニアのヴィリニユス）の尚書院に残るものは「古ベラルーシ語」に分類された（Anichenka 1969; Grynchysyn, Gumets' ka and Kernyts' kyii 1977: 5 を参照）。現時点でのニーズに応えるための懐古的な方法による言語工学や過去の文化的要素の再編成についてのもうひとつの事例である。

### ナショナリズムからインターネットへ

西ヨーロッパと中央ヨーロッパ全域でのラテン語に基づく教育の名声は、イエズス会が創設・運営していた貴族や中産階級の師弟を対象とする大規模な教育組織に依っていた。このモデルは時にプロテスタント国家でも、とりわけスカンディナヴィアやオランダ、神聖ローマ帝国の北側半分でも手本とされた。こうしたイエズス会の教育組織は、1773年にローマ教皇がイエズス会を禁止したことで突然の終焉を迎えた。校舎や図書館、寄宿舎などの資産の一部は失われたが、その多くは様々な運営者の下で同じような教育目的で使用され続けた。そうした運営者の変更により、ポーランド・リトアニア共和国では教育言語がラテン語からポーランド語に完全に置き換えられることになった。実際には、19世紀初頭まで中等教育や大学教育における教育言語としてラテン語は使用され続けたが、その頃にはすでにポーランド・リトアニア共和国は分裂し、ヨーロッパの地図上から姿を消していた（Bobková-Valentová 2006; Klemensiewicz 1999: 496-516）。

西ヨーロッパにおけるラテン語の教育や行政からの段階的な消滅は、中央ヨーロッパにおけるほどには大きな意味をもたなかった。何故ならば、西ヨーロッパでは、英語やフランス語、スペイン語、オランダ語、ドイツ語、トスカーナ語（イタリア語）といった国家語がすでにラテン語を隅に追いやってしまっていたためである。18世紀に、フランス語は全ヨーロッパ的な識字や社会的栄達のための新しいリングァ・フランカとなり、その機能においてラテン語に完全に取って代わった。当初フランス語は西ヨーロッパや中央ヨーロッパの貴族や上流階級の新しい共通の社会方言として広がったが、すぐにロシアでも、また19世紀中葉以降はオスマン帝国でもその役割を担いはじめた。中央ヨーロッパや東ヨーロッパではその役割においてドイツ語が強力な競争相手であったが、19世紀中葉から20世紀中葉にかけてフランス語は外交や学術の分野における地球語であった。第二次世界大戦の悲劇は政治的・経済的な均衡を変化させたが、それは英語をヨーロッパや世界中での技術や政治の新しい媒介言語とするのに有利に働いた。ロシア語を少なくともソヴィエト圏のリングァ・フランカとしようとするクレムリンの圧力は、主としてソヴィエト圏諸国とソヴィエト連邦間の監視されない自由な大衆の移動が不可能であったために奏功しなかった（Crystal 1997; Fumaroli 2011 を参照）。

フランス革命の思わぬ成功は、前述のような世界的なリングァ・フランカとしてのフランス語の台頭の一因となった。フランス王国は中央集権的なフランス国民国家に一新された。すべての男性には完全に平等な同等の市民権が与えられ、その代わりに革命軍に召集された。その後すぐに言語の中央集権化と均質化が続いた。1793年に、行政、教育、公的生活でのフランス語以外の言語の使用が禁止され、その5年後には、フランス科学アカデミーが1694年に初版が刊行されていた権威的な規範的辞書の第5版——革命的な版——を刊行している（Nadeau and Barlow 2008: 145）。



このように、国家独立や権力の正当化の新しいイデオロギーとしてのナショナリズムは、言語政策と強固に結びついていた。国民国家の一連の言語政策を通して、国家機関や学校における国家の（できれば単一の）公用語の使用が国内全域で確立された。また、言語の規範は、国家公認の権威ある辞書や文法書で国家の科学アカデミーが詳細な解説を行うことで整備されいった。（これが規範主義が支配的な「大陸」と記述主義的な英語圏世界の間の言語管理に対するアプローチの根本的な違いを生んでいる）。そうした辞書や文法書は教科書の編纂のために用いられ、義務初等教育を通して国家のすべての住民（すなわち「国民」）に共通の国語の知識を広めた。大学は教育言語として国家の言語（国語）のためにラテン語の使用を止め、話し言葉と書き言葉の双方でその国語の書記形態に通じた教師を小学校に提供した。すべての男性に（その社会的地位には関わりなく）義務付けられていた兵役は、それが遠方の県と首都出身の兵士間の伝令や親交の言語であったため彼らの国語能力を向上させた。こうした学校、軍隊、アカデミー、大学といった自己増強型の社会工学の手段は民族言語的均質性を増大させ、またその実現には急増した国語での雑誌や安価な書籍が一役買った。それでも言語的な差異は残存したが（国家は依然としてその除去を望んでいた）、20世紀になり登場した映画やラジオ、そしてもっとも重要なテレビといった遍在的なマスメディアがそれに対する最終的な均平機として機能した。

ナポレオン戦争は1806年に神聖ローマ帝国を崩壊させた。それにより、制止不可能に思われたフランス軍の侵攻に対抗して生まれたドイツのナショナリズムは、大半がゲルマン語話者である人々をドイツ民族に、そして帝国を民族固有の国民国家に作り変えることができたかもしれない政治機構を奪われた。こうした窮状に直面して、ドイツの民族運動家たちは、ドイツ語をドイツ国家の建設のための基盤と決めた。それは国家の建設が完了したあかつきには、その国家が祖国にふさわしい地位を得ることを希望しての決定であった。こうして新しい民族言語に基づく種類のナショナリズムが誕生した。こうしたこれまでなかったナショナル・アイデンティティの最初の成果は、1861年と1871年のイタリアとドイツの民族言語的に基づく国民国家の建国であった（Abizadeh 2005）。

特にフランスやドイツの空前の経済的・政治的・軍事的・社会的成功が与えた大きなインパクトにより、民族言語ナショナリズムや中央集権国家の思想は、中央ヨーロッパの他の多くの民族運動に刺激を与えた。言語名や文字、綴字法の種類が決定されることで、また権威ある辞書と文法書を通して、自言語の体系化や標準化がはじめられた。そのうち新しく創造された標準国語による文学や出版が姿を現した。学術機関や教育機関と並行して、国語を支援しかつそれを会話や商売の唯一の媒体として使用することを目的とする経済や農業に関する団体・組織や政党が現れた（Sundhaußen 1973）。

民族言語により定義される「自治権と民族の権利」を求める声は、1848年から1849年にかけての中央ヨーロッパ全域での（ロシア軍の支援を受けた）大規模な弾圧に直面した。しかし、オーストリア帝国とプロイセンで農奴制が完全に清算された後では、またそれにより1871年にはドイツ帝国で、

1907年にはオーストリア・ハンガリー帝国のオーストリア側（ツィスライタニエン）で男性普通選挙の導入が実現された後では、そうした流れを覆すことは不可能であった。同じような変化が1860年代から1905年の短期間により急進的な形で、ロシア帝国で繰り返された。多数の民族で構成されていたハプスブルク帝国やロマノフ朝、オスマン帝国は、高揚する民族言語に基づく民族運動による社会・政治的な圧力の矢面に立たされることになった。「文明」国家であれば国勢調査に国籍の「信頼できる」尺度としての言語調査を含んでいるべきであるとするプロイセンの提案を真に受けることで、その後に行われた国勢調査の結果は、指導者たちが求める民族の人口統計学的な規模に関する「客観的データ」で彼らを武装させることになった。また、そのデータはそれぞれの民族の国民国家のために非民族的帝国をどのように分割するべきであるのかも示していた。（Böckh 1866; Kertzer and Arel 2002; Leuschner 2004; Silver 1986）。

先述の通り、ロシアは均質化を目標とするロシア化政策を推し進めたが、それは1860年代から1905年の革命まで変わることなく続いた——革命時には民主主義および様々な言語や文字での出版の自由の要求に少なくとも一時的には譲歩しなければならなかった。一方で、18世紀以来、サンクト・ペテルブルクはオスマン帝国における（正教派）キリスト教徒の権利の擁護者の役割を自任していた。ロシアは18世紀に崇高な帝国から黒海の北側沿岸一帯の領土を獲得しその地にイスラム教徒を追いやり、続いてバルカン半島に橋頭堡を築くことを望んだ。

モンテネグロ、セルビア、ギリシア、ブルガリア、ルーマニアといったバルカンの国民国家は、そもそも19世紀の前半に、フランスや19世紀の変わり目に南北アメリカ大陸で出現していた数多くの国民国家をモデルとした民族宗教的な国家プロジェクトとして現れた。それらバルカン半島の国民国家は言語政策にそれほど関心を示さなかった。最優先事項は宗教であり、国内の宗教的均質性を実現するためにも、残っていたイスラム教徒の排除が第一であった。そもそもブルガリアやモンテネグロ、セルビアではますますロシア語化されていた教会スラヴ語が公的な用途で使用されていたが、それは徐々に現地語化され、最終的には「スラヴ・ブルガリア語」や「スラヴ・セルビア語」と呼ばれる混成的形態（ロシアの現地語化された教会スラヴ語の特徴と類似点が多い）となった。ギリシアの場合は、上述の「スラヴ・」式のスラヴ諸語と同じように、書記ギリシア語（より厳密には古典ギリシア語、典礼ギリシア語、「ビザンツ」ギリシア語などの諸書記ギリシア語）にアテネ人の日常の話し言葉（またはデモティキ）の要素が混じったものがカサレヴサ（「純粹言語」）であった（Albijić 1985; Mackridge 2009; Rusinov 1999: 504）。

ブルガリア語は、20世紀の終わりまでに、言語の標準化のヨーロッパ・モデルに沿って作られた独立言語として現れた。ギリシア語のあるべき姿についての論争は20世紀の後半にまで続いた。1976年にデモティキがギリシアの公用語とされたが、それは古典ギリシア語とカサレヴサの要素は学校で教え続けられ、新約聖書のギリシア語はギリシア正教での典礼言語として機能し続けるという妥協



案であった。新約聖書のデモティキ語訳の出版は、1901年と1903年にアテネで暴動を引き起こした。新約聖書や七十人訳聖書のギリシア語原典は典礼において依然として使用されているが、正教会公認のデモティキ語訳聖書が1997年に出版された。ただし、その翻訳は非典礼的な信徒間の私的な熟読の用途に限られている (Mackridge 2009: 247-252)。

それはロシア語訳聖書にまつわる物語の焼き直しであった。1810年代の最初の試みは、聖なる言語である教会スラヴ語聖書に対する冒瀆であると見られた。正教会が公認した翻訳は1876年に出版されたが、それは皮肉にもカール・マルクスの『資本論 *Das Kapital*』の第一巻のロシア語訳が刊行された4年後であった (Pervyi 2014; Rizhskii 2007: 160-192)。当然、ギリシアと同様、「聖なる」教会スラヴ語訳聖書はロシア、ベラルーシ、ウクライナ、ブルガリア、マケドニア、セルビアで正教会の典礼で用いられ続けている。

同様に、クルアーンのヨーロッパ諸語（まずはラテン語）への翻訳がすでに16世紀には出版されはじめていたという事実にもかかわらず、イスラム教徒も——彼らの日常のことばにかかわりなく——アラビア語の原典に固執した。神（アラビア語ではアッラー *Allah*）がムハンマドに語ったものと信じられているその原典は、依然としてイスラム教の典礼における必須書であり続けている。それでも、聖書を「世界中のすべての言語」に翻訳しようとする19世紀から20世紀にかけての巨大プロジェクト (The Bible 2014) に影響を受けて、20世紀の後半に同じような試みがイスラム教国で定期的に行われた。戦間期のトルコがその分野の先駆けであった (About Al-Quran 2014; Wilson, M Brett 2009)。

こうした聖なる言語の翻訳や正典を機械的に再生産することへの反対から、印刷の普及は正教世界とイスラム世界で同じように停滞した。それらの地域では20世紀になっても、手で書き複写する写本の文化が残り、場所によってはそれが優勢であった。印刷は18世紀にロシアで発展した。1830年代にはそこから思想や技術がセルビアに伝えられたが、一方で最初のブルガリア語の印刷所は1840年代にオスマン帝国に開設された。その後の数十年の間にロシア式のグラツダンカが急速に（典礼書は別として）印刷の教会キリル文字に取って代わった (Crampton 2005: 60; Dubovac 1975; Gorshkov 2009)。オスマン帝国では16世紀以来、キリスト教徒とユダヤ人のために印刷機の設置が許されていた。しかし、それは聖なるアラビア文字を用いた（すなわちアラビア語、オスマン語、ペルシア語の）書物を作成しないことを条件に——あくまでそれは神聖を冒瀆する行為であった——印刷業者に許されたものであった。史上初のオスマン語の印刷所が1727年に開設されたが長くは続かなかった。そのオスマン語やアラビア文字での印刷が本格的にはじまるのはタンジマート改革の時期になってようやくであり、政府のオスマン語の印刷所が創設されたのは1835年であった (Shaw and Shaw 1977: 128; SomeI 2003: 236)。

印刷、教育制度、国家機関、徴兵制の普及により、俗語から言語を創造するという考えや方法がバ

ルカン半島にもたらされた。19世紀の前半には、イリュエ語（クロアチア語）やセルビア語の支持者たちがその2つの言語の辞書と文法書の編纂に熱心に取り組んだ。しかし、その世紀の後半になると、彼らのほとんどが全南スラヴ人のためになると期待されるひとつの共通語、つまりはセルボ・クロアチア語を発展させることに同意するようになった。正教徒のセルヴィア人（ブルガリアはそのプロジェクトに参加していなかったため大半はセルビアに住んでいた）のためにはキリル文字で書かれ、（オーストリア・ハンガリー帝国内の）カトリックのクロアチア人のためにはラテン文字で書かれるものであった。後者ではフス派のチェコ語綴字法が用いられた。1880年代にオーストリア・ハンガリー帝国のボヘミアとモルダヴィアでチェコ語（およびモラヴィア語）が（ドイツ語と並んで）公用語とされたことが示しているように、かつてその正書法と結び付いていた宗教対立は不問とされた (Hlavačka 2005)。

オーストリア・ハンガリー帝国のボスニアにおけるボスニア語の出現は短命であった。第一次世界大戦後のセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国（1929年以降はユーゴスラヴィア）の建国は、民族言語、つまりセルボ・クロアチア語の民族共通性に基いていた。後にスロヴェニア人が加わり、国家の公用語はセルボ・クロアチア・スロヴェニア語となった。こうした問題の解決法は、チェコ語とスロヴァキア語の領域的に区切られた2つの変種からなっていた戦間期のチェコスロヴァキアの公用語・国語であるチェコスロヴァキア語を手本としたものであった。戦間期のチェコスロヴァキアの解体を受けて、1938年以降チェコスロヴァキア語はチェコ語とスロヴァキア語の2つの別々の言語に分裂し、以後再び一緒になることはなかった。セルボ・クロアチア・スロヴェニア語も同様の運命をたどった。第二次世界大戦の間に分裂し、その後いく度かの組み換えを経て最終的にセルボ・クロアチア語、マケドニア語、スロヴェニア語という3つの別々の言語が誕生した。その後20世紀末に生じたセルボ・クロアチア語の分裂は、緩やかなユーゴスラヴィアの崩壊を反映したものであった。結果的に、ボスニア語、クロアチア語、モンテネグロ語、セルビア語というセルボ・クロアチア語の4つの変種が出現している (Greenberg 2004)。

このようにユーゴスラヴィアの後裔のそれぞれの国民国家（コソヴォを除く）は、言語と民族を等値する民族言語ナショナリズムの論理に従い、他の民族と共有していないその固有の国語を受け入れた。文字により隔てられる2つの変種から構成されるセルボ・クロアチア語は「分割されるべきである」との意見をもつ者もいる。しかし、ほとんど忘れられているが、その混成的言語は、チェコスロヴァキア語と同様に、そもそもノルウェー語についての影響力のあるモデルを参照したものであった。1885年以来、ノルウェー語は、ノルウェー語化されたデンマーク語（ブークモール）と復興したノルド語とされるニーノシュク（新ノルウェー語）の2つの変種で構成されている。そうした混成的言語が形成される過程での様々な政治的・社会的対立にもかかわらず、ノルウェー語は分裂していない (Haugen 1976: 35-36)。



ラテン語の公的な使用は（今日のスロヴァキアからクロアチアに広がっていた）ハブスブルクのハンガリー王国で、1844年にハンガリー語に取って代わられるまでもっとも長く生きながらえた。（当然、カトリックの典礼では1970年代の変わり目までラテン語は存続したし、またヴァチカン市国では現在でも公用語であり続けている）。1848年および翌1849年の反乱に刺激された革命的国民運動が鎮圧されたことで、ハンガリー語を犠牲にしてラテン語とドイツ語が再び王国で使用されることになった。同様に、クロアチア語やルーマニア語、さらには生まれたばかりのスロヴェニア語やスロヴァキア語の公的使用やそれを用いた教育も、短い間ではあるがいくらか認められた。1850年代から1860年代にかけて、ドイツ語はハンガリー王国を含むオーストリア帝国全域で教育や公的用途の主要言語であった。1866年にプロイセンはオーストリアに大勝利を収め、ドイツ同盟（1815年に成立された神聖ローマ帝国をいくらか引き継ぐ同盟）の北半分をドイツの国民国家にしようとする政治的計画が推し進められることになった（Wandruszka and Urbanitsch 1980: Vol 1）。

その3年後にベルリンはドイツ帝国を成立させたが、一方でウィーンはわずかな正当性を取り戻そうと1867年に帝国を二重のオーストリア・ハンガリー帝国とした。それはハンガリーの民族言語的な国民運動の拡大しつつある力に配慮したものであった。チェコとクロアチアの民族運動の指導者たちはこうした展開を歓迎していなかった。彼らはスラヴ人のために3つの構成要素からなる君主国家を期待していたのである。チェコの指導者たちの怒りは収まらず、ポーランド・リトアニア共和国の貴族をその二重のプロジェクトに引き込もうと、1869年にポーランド語が帝国領ガリツィアの公用語とされた。こうしてボヘミアのチェコ人たちの不満は、ガリツィアにおけるポーランド語の地位によってどうにか抑え込まれていた。その1年前の1868年には、ハンガリー政府が王国内のクロアチア地方とスラヴォニア地方でクロアチア語に公用語の地位を与えていた。

イタリアやドイツ、ロシア帝国で民族言語的な均質化政策が行われたのに対して、ウィーンは、それが必要かつ望ましいのであれば、一定程度の民族言語的な領土的自治を認めることで帝国の一体性の維持をはかった。各州で連邦の4つの公用語のいずれかの言語による公的な単一言語主義を採用していたスイスは、そのための従うべき分かりやすいモデルであった（Müller 1987）。民族言語に基づく様々な民族運動の要求や利益はそれぞれの地域で対応することが可能であるため、多民族帝国の政治的・領土的な統一性の維持につながるという考えであった。しかし、ブダペストのハンガリー政府はその問題についての取り決めに反し、二重帝国のハンガリー側（トランスレイタニア）の非マジャール人（つまり非ハンガリー語話者）に対する徹底的なマジャール化（ハンガリー化）政策に着手することを決めた。それは彼らの不満を煽り、民族運動は高まりを見せた。それ以前はハンガリーにきわめて忠実であった非マジャール人たちもすぐにその運動に加わった（Berecz 2013; Wandruszka and Urbanitsch 1980: Vol 2）。

18世紀以降からバルカン戦争（1912-1913年）や第一次世界に至るまで、キリスト教の近隣諸国や

新興のキリスト教国民国家のためにオスマン帝国は次第に領土を喪失してきたが、それはオスマン帝国の支配層にあるトルコ語話者の選良層の間に同じような不満を高めた。そうした不満は、繰り返される失った領土からのイスラム教徒の排除や、そこに残るイスラム教徒への迫害によりさらに高まった（Toumarkine 1995）。帝国の政治的基盤としてのイスラム教とトルコの民族言語ナショナリズムとの合流は、崇高な帝国の崩壊と、その後の民族言語的に基づく国民国家という中央ヨーロッパのモデルに従ったトルコの建国という劇的な社会的・政治的変化を支えた。トルコの民族言語ナショナリズムを支えた諸変化は、先に1912年から1913年に独自の民族言語的に基づく国民国家を建設していたアルバニア人との関係を悪化させた。また、こうした崇高な帝国末期の民族言語的かつ宗教的な均質性という聖杯を求めて盛り上がった民族化の流れは、1915年のアルメニア人とアッシリア人の大量虐殺も可能とした（Akçam 2006）。

1918年以降、崩壊した中央ヨーロッパの多民族帝国の領土は新たに建国された国民国家に分配されたが、それらはおおむね民族言語的な原則に基づいていた（顕著な例外は連合国がその都市の港を求めていたドイツやポーランドのいずれかに与えることを嫌った自由都市ダンツィヒである）。その原則では、複数の言語を話し書く住民を抱える国家は正当ではないことになる。近代初期の国境内における民族宗教的な均質性の原則（その領土に属すならばその宗教 *eius regio cuius religio*）は、その現代版、「その領土に属すならばその言語 *eius regio cuius lingua*」に取って代わられた。しかしながら、チェコスロヴァキアやエストニア、フィンランド、ハンガリー、ラトヴィア、リトアニア、ポーランドでその固有の国語を話している民族の他に、別の言語を話す人々——1918年以降の新しい用語法では「少数者」と呼ばれる——が依然として残っていることがすぐに明らかになった。巨大な帝国はその小さなミニチュアに置き換えられたのであり、民族言語的均質性の理想は究極的には実現不可能であった。

中央ヨーロッパの国民国家の中で、フィンランドのみが国語のフィンランド語に加えてスウェーデン語をもうひとつの公用語として制定している。しかし、この決定は、言語問題を中心とする国内の激しい論争を経てなされたものである（Hamalainen 1979）。その公的な二言語使用により、フィンランドは三言語使用（1938年まで）のスイスや二言語使用のベルギーの仲間に加わった。19世紀末以降、言語対立は定期的にベルギーを揺るがしてきたが、近年ではそのディレンマに対する解決策を国家が見つけ出したようで、スイスのモデルに倣いそれぞれの州で公的な単一言語制度を導入している。ただし、このスイス・モデルが変更不可能というわけではない。それは1938年にロマンシュ語を第4の公用語としたスイスの事例が示している。現在ではロマンシュ語の話し手はグラウビュンデン州の行政機関でその言語を使用する権利を享受している（Mallinson 1969: 176-190; McRae 1998: 120）。

民族言語ナショナリズムが規定するような完全な単一言語主義（国家の全住民によるあらゆる生活



カムセラ「中央ヨーロッパにおける言語の創造：長期的な観点から」

領域における単一の国語の規範的使用)は実現が困難であることにはかわりない。複数の変種によるダイグロシアないしポリグロシア(すなわち個人による異なる生活領域における異なる変種の使用)が依然として普通である。国家の要請で学校や軍隊が方言や国語とは異なる言語を根絶しようと試みたことがあったが、それは遅々として進まなかった。残念なことに、ソヴィエト(共産主義)やドイツ(国家社会主義)の全体主義、さらには第二次世界大戦の悲劇は、民族言語的均質性を求める国家の指導者たちに有利に働いた。ユダヤ人やロマ人のホロコーストに行き着いた大量虐殺の政策が数百万の人間を殺した一方で、数千万の人々が祖国を追われ、はからずも「民族的に誤った」国家に居住する事態も引き起こした(Prusin 2010; Snyder 2010)。

そうして20世紀中頃までに、国民国家とそれぞれの民族言語的に定義される国民がほぼ完全に一致する状況が生じた。今日、こうした成果は長期的な観点からすればきわめて異例なものであるにもかかわらず、それが「自然」あるいは「正常な」状態であると考えられている。皮肉なことに、1992年の欧州連合(EU)の設立と1995年、2004年、2007年、2013年と続いたその東方への拡大は、多言語主義を中央ヨーロッパに取り戻すことになった。国境や法の壁に妨げられることなく共通のEU市民に対する待遇から、何百万もの人々が国境を越えて移動した。EUの24の公用語がEUの諸機構で、また全加盟国でますます使用されるようになってきているのである。

## ケチュア語とアイオレオ語の「言語名称の書記体系」—中南米における諸言語の規範化をゆがめるとぼ口

寺尾智史

### 0. はじめに

後で述べるように、東アジアの人間にとっては聞きなれない地域や言語に関わることがらは、とりもなおさず、東アジアの人々が日々じかに触れ、聴き、話している、モンゴル語、中国語、日本語、英語等々に起こっている出来事、とりわけ、ことばという対象をどんな(たいていの場合、ゆがんだ)鏡に映し、そしてどのように書き下すか、すなわち「書記化」するか、という問題群を考えるうえで、うつし鏡になると考えるからである。

私は「中南米における諸言語の規範化」という題名で発表を行うが、西はパナマとコロンビアとの国境線、東はトリニダード・トバゴとベネズエラを隔てる海峡によって中南米を大きく中米と南米に分けるとすれば、今回はこれまでフィールドワークの機会が得られた南米を中心にまとめることとする。

スペイン人もしくはポルトガル人が侵入する以前の、いわゆる「プレコロンビア(先コロンブス)期」においては、中米には、ごく限られた社会階層のみではあったが、マヤ文字という形で「書記伝統」がかろうじて存在した一方で、考古学上、南米では書記の習慣が発見されていない。この状況の中、南米に関する「書記」に関する記述は、南米への「征服者の侵入」、より象徴的な事件としてはピサロによるインカの滅亡以降に限られることとなる。

### 1. われわれはいったい「何語」を話しているのか?

南米における書記の中心がスペイン語、ポルトガル語になることは論をまたない。スペイン人、ポルトガル人による「植民」以降、ガイアナ、仏領ギアナなどごく一部の国や地域以外では公用語として圧倒的なプレゼンスを持つこの二大言語が南米の書記という行為をほぼ独占している。「諸言語の規範化」とい



科研「書記伝統のなかの標準規範に関する歴史的東西比較研究」  
報告書（日本語版）

### 第1部 東西比較

原聖「科研「書記伝統における標準規範の歴史的東西比較研究」のめざす  
もの」 **3**

フロリアン・クルマス（石部尚登訳）「書記体系と標準化」 **25**

トマシュ・カムセラ（石部尚登訳）「中央ヨーロッパと東・東南アジアの類似性：  
言語と民族と国家の規範的同型性」 **49**

白音門徳（バイルモンド）、珠麗（シュ・リー）「東西文字規範の比較——モンゴ  
ル文字を例にして」 **70**

ディック・スマックマン（石部尚登訳）「標準語標準方言に関する構造主義的、  
社会言語学的理論をめぐって」 **79**

### 第2部 南アジア

藤井毅「拮抗する文字体系：デーヴァナーガリー文字とカイティー文字」 **95**

名和克郎「識字者が標準規範なしに母語で書く時——ネパール、ビャンス及び  
周辺地域のランを事例に——」 **120**

### 第3部 欧州

原聖「ケルト諸語と言語規範」 **133**

トマシュ・カムセラ（石部尚登訳）「中央ヨーロッパにおける言語の創造：長期  
的な観点から」 **150**

寺尾智史「中南米における諸言語の規範化」 **173**

石部尚登「公権力の存在を前提としない書記規範の固定化——ワロン語の「正  
書法」を事例に」 **184**

チアド・デフラーフ（寺尾智史訳）「オランダ語、フリスケ語、低地ドイツ語  
——ゲルマン諸語の二つの少数言語とともに示すオランダと関連地域の言語  
状況」 **200**

ニコラス・オストラー（松井真之介、崎山拓郎訳）「ヨーロッパ史の中のラテン  
語——古典的規範」 **210**



書記伝統のなかの標準規範に関する歴史的東西比較研究

原聖（編）（日本語版）

---

書記伝統のなかの標準規範に関する  
歴史的東西比較研究

---

原聖（編）（日本語版）

書記伝統のなかの標準規範に関する歴史的東西比較研究

原聖（編）（日本語版）

平成28年3月20日印刷  
平成28年3月30日発行

編者：原聖

発行者：女子美術大学

〒166-8538 東京都杉並区和田1丁目49番8号

電話 03 (5340) 4514

〒252-8538 神奈川県相模原市南区麻溝台1900

電話 042 (778) 6616

制作

（株）三元社

〒133-0033 東京都文京区本郷1-28-36 鳳明ビル